

# 漁況海況予報事業浅海定線調査

## ( 要 約 )

尾坂 康・植木 龍夫・永峰 文洋・三津谷 正  
伊藤 進・浜田 勝雄・鈴木 勝男

この調査は、陸奥湾内の海況の特徴や変化を把握し、湾内漁業および増養殖業のための予報や健全な発展に資することを目的として実施したものである。詳細については脚註の資料に報告済みであるのでこれを参照されたい。

### 調 査 方 法

調査地点…… 6 定点

調査水深…… 0、5、10、20、30、40、50 および底層

調査項目…… 水温、塩分、COD、水色、透明度、卵稚魚、PH、プランクトン、気象、海底土の強熱減量、粒度組成、全硫化物

### 調 査 結 果

- (1) 水温は、8月に表層で24.7℃～25.6℃の最高水温を観測し、9月になっても水深20m付近まで23℃以上を、底層でも20℃前後の高水温を示した。最低水温は、東湾で2月の2.7～4.6℃が、西湾で3月の4.4～5.5℃が観測された。
- (2) 塩分濃度は、4月から10月頃にかけての成層期には表層部が低鹹となる傾向があった。これは、5月の融雪水、7、8月の降水などによる影響を受けたもので、32.0～33.2%の低塩分水を示した。最高塩分水は8月に西湾の底層で34.2%が観測された。
- (3) CODは、0.03～1.5 ppmの範囲内にあった。
- (4) 透明度は、11月のst 2.3で23m、7月、3月のst 4で22mの高い値を示した。
- (5) PH(表層水)は、8.2から8.4の範囲内にあった。
- (6) 卵、稚魚は、6～7月ではクロソイ、ヨウジウオ、カタクチイワシ、アミメハギ等が、11～4月ではアイナメが出現し、動物プランクトンでは3～5月にノクテルカ(夜光虫)、5～7月にカニのゾエア期幼生、枝角類、7～10月には端脚類マントヤムシ、10～1月にはフジツボ類のノープリウス期幼生が多く出現した。
- (7) プランクトンは、5月から9月の間、沈澱量が少く、秋～冬の期間は植物プランクトンが優勢であった。
- (8) 海底土の強熱減量は、4～17%の範囲内にあった。
- (9) 海底土の粒度組成は、殆どが泥質で含泥率が高く、特にst 2、3、4が卓越していた。
- (10) 海底土の全硫化物は、0.01～0.5 mg/gの範囲内にあった。

詳細については「昭和50年度漁況海況予報事業浅海定線調査、青森県水産増殖センター昭和51年3月」に報告済み。